

り是を正直とす。と云ふ事がある。今時の人に正直の體を云へ、と云つたら云ひ得る人は恐らくあるまい。それ故、古人の言にはない事であるが、我は理を正し義を行つて私の心なきを正直の體とすと書いたのである。我が正直の體とは是れである。

更に、佛法の上に於ける正直と云ふは、一切有爲の法は虚妄幻化の偽りと悟つて、本来本法身天然自性の儘に用ふるのを眞の正直とす、と云ふたのはわざと高く書いたのである。十牛の圖で云へば十番めの、あの瓢をさげて市に入る境界などが、天然自性のまゝに用ひた正直の人と云ふのである』と、次に、

『凡夫は先づ病を知るべし。生死無明の心中に顛倒迷妄の病あり。慳貪邪見の病あり、怯弱不義の病あり、三毒の心を根本として八萬四千の煩惱の病となる。此心を除滅するを佛法と云ふ也。是れ世法と異んや。何と悪い事をなくするを世法に背ひた事と云んや。亦夫れ達道人と云ふは、本來空なる理を知つて、理と義を鍛冶と作し、日夜此心を錬鍛へて不淨穢惡を去り、清淨無碍の心劍となし、我執貪着の念根を截斷して、萬念に勝得て一切の上に乗つて、物の爲に煩はず、不生不滅なるを道人と云ふなり——と云ふのは、人間理と義を以て心を磨かすして何を以て磨くのか。是を以て強く磨く則んば不淨のさびは去

り、切れ端生じて我執の念根を切るのである。我執さへ切れば萬念に勝つて、自在である。苦樂ともに何ともなき是れを道人と云ふのである』と。

嗚呼實に我執である。澤木興道師の書にも丘宗潭老師に入室の雲水が、『一大事をお示し下さい』と云ふと『誰れの一大事ぢや』『私の』と云ふと、『ウーム？ 貴様か、貴様一人ぐらゐ……どうでもよいぢやないか……ワツハツハツハツハツ』と笑はれた。その笑ひ方はまるで惡魔が毒氣を吹いたやうなものであつた。とあるが……之れを読む度に眞に寒毛卓立するのである。私の如きも此の私を持ち出して

『何ぢや私、その私があるから女房に會へば女房にこき使はれ、餓鬼には餓鬼に追ひ廻されるんぢや』と嘲罵されて、全く冷汗三斗、眞赤になつて引下つた覺えがある。我執の面出しこそは、我々にとつて一番耻辱しであるからだ。

また凡夫と云ふは幻化の偽を實となし、有相執着の私の心を造出し、貪瞋痴の念を始めとし、あらゆる煩惱を起し本心を失ひ、散亂の心休時なく、念々發るに隨つてその念に負けて心をくだき、身を苦めて浮心なく闇々として空しく光陰を送り、己に迷ひてただよひ、物に逢着するを凡夫と名けたり——

と書いたのは、人々己がこの偽の身を自我と認め、これを根本として種々身勝手な私心を出し、憎いとは負け可愛いとは負け、惜しいとは負け欲しいとは負けて、更に一層の妄念を生じ、念毎に負けては沈み果てて、身を苦め心を惱し、次々と起る事象に心を取られて追廻されて暮してゐるのを凡夫と云ふたのである。

## 勇 猛 心

又、本来心の異名を知るべし、金剛の正體とも堅固法身とも云ふ。此心物に拘はらず、恐れず、驚かず、憂へず、退かず、不動不變にして一切の主人となる。如是通徹して用ひ得るを、大丈夫の漢、鐵心肝、達道人など云也、此人萬念に碍られず、萬事を使得て大自在也。然間佛道修行の人は先づ勇猛の心なくして叶ひ難し。

これ即ち、大丈夫、鐵心肝に到達すべき道であるから、たゞ此の勇猛の心一つなりと呑み込んで、一頭に強き心を用ひよ、と云ふ事である。是れ一つをさへ聞こしめさるれば用は調ふのである。多くの人が皆な爰の所をうっかりと見てゐる故にぐどつくのだ。

正三老人は、是れ一つさへ聞こしめさるれば、と語を強く自ら註してゐる。誠に正三佛法の骨髓がこゝにあるが故である。自隠禪師も、勇猛の衆生の爲には成佛一念にあり、懈怠の衆生の爲には涅槃三祇にわたる、の語をしばしばその書中に引いてをられる。斷と云ふも勇猛である。悟といふも勇猛である。我々に繫縛する所の妄念、妄想——、人は多く對象あつて始めて妄念妄想が生ずる、と觀じてゐるが、對象の顯現以前に妄念妄想は已に嚴として存在してゐるのである。

いまその對象なき妄念妄想を截斷せんとする時、不思議にも別離の哀愁にも似たる堪え難き苦惱を生じて來る。そして己れ自身が、これ何の苦ぞと不審に到るのである。對象との別離の苦惱は、理知もそのよつて生ずる所以を教へるであらう。時の流れが忘却の手段を講じてくれるでもあらう。併しながら、無始以來、生死を共にし、それに依つて生死して來た所の根本無明は、これを斷つべく仲々に難く、斷ち切る努力と苦惱の更に一層切なるものあるべきは寧ろ當然の歸結である。此所に於て古人はこれを大死一番と云ひ、懸崖に手を撒すとも云つたのだ。即ち根本無明との別離の苦惱である。書いて此所に到つてふと想起したのは、紀平正美氏が、無門關解釋の中(であつたと記憶する)に——そんな

事は美味物を喰つても判らない坊主に任しておくさ（或は坊主には判らんだつたか）の語である。

食味の上の美味不味の判断は別として、この語は恐らく、人情の機微には觸れ得ない僧侶、と云ふ事に解釋してよいと思ふ。そして、長らく私の心にも疑問となつてゐたのである。年少にして寺院に入り、たゞ修行三昧にして學長け徳高くなり得たとしても、その人人には眞實人生の種々相が判るであらうか、と云ふ事であらう。彼はただ五欲の現實的對象に眼を閉じて只管に修行に勵んだ、と先づ我々は想像する。併しながら、かく稀有の事を假定したとしても、彼は自己の藏する五欲に對しては如何にして眼を塞ぎ得るであらうか。即ち彼は外界の事象を遮斷すればする程、自己自身の根本無明に一層切實に當面しなければならなくなつて來るのである。

眼耳鼻舌身意の六字に抽象された所の我々の欲望は、開けば八萬四千でも無量恒河沙の煩惱ともなるものを各自は持つてゐるのである。修行者は如何にして自己の藏する妄念に對して眼を閉ずる事が出来るのか。彼が修行に熱心であればある程、鮮明に切實に自己に當面しなければならなくなつて來るのである。白隠禪師の所謂、——此時恐怖を生ぜず、

一人と萬人と戦ふ如く、牙關を咬定し面皮を冷却して、烈しく進んで破らんとす。如何せん根本無明の衆魔、轉攻れば轉強き事を。三毒五欲の賊黨、雲の如く争ひ起り、十惡八邪の妖魅、風の如くに嗔り吼ふ。千妖百怪心田を侵撓し、法體を困勞す。——とは此間の消息を語つてゐるのである。

即ち對象を明らかに認める方法である。これは勿論、系統的に現はれるものでもなく、理論の對象としての姿でもない。然し我々の心幹の根源に於て、截然として苦惱の對象となつた所の明らかなる現實である。藝術家はこの苦惱の對象に明らかなる姿を與へて表現する所に、彼の現實を踏み越える力を示す。修行者にあつてはたゞ克服あるのみである。そして彼が如何によくそれを克服し得たかによつて、結果は姿無く擴大される。泥多ければ佛大なり、の語はそれを示してゐるのである。洒々落々、飄然逸脱等の語は、眞實の意味に於て、人情の機微に對する無知を意味しない。彼は今それ等の物に拘はらないだけである。曾ては自己を驅使して愛憎好惡の中に轉々せしめた物を、今はそれを驅使してゐるのである。煩惱即菩提である。

此の本來心に達する爲に、正三老人は勇猛の心一つと説く。成佛一念にありの一念であ

る。勇猛の一念は寸分の隙なき一念である。古人はこれを正念相續と云つた。我々に到つては、常に對象に心を奪はれてゐて、ふと思ひ起した時だけ勇猛の心を思ふが如き有様である。それ故に勇猛の一念の爲にも勇猛の心が必要にさへなつて來るのである。要するに勇猛の一念に求道の一切は盡きるのだ。是れ一つをさへ聞こしめさるれば、の正三の言、深く心に體すべきである。

また、煩惱心を以て武勇樊噲を欺く人も、臨命終に至つて無常の殺鬼責め來ん時、日頃の威勢盡果て、勇猛心も失せ、力を出すこと能はず、苦患強きに隨つて臆病を現はし、死出の山の大難たへ難く三途の川に溺れて、閻魔の廳庭に耻を曝し、永く三惡四趣に墮在して、世々生々耻をさらすべきこと自と云ひ他と云ひ遁れ難かるべし。

と書いたのは、血氣の勇は血氣が盡れば用には立たぬ、かた息になつた時にどうして用ふる事が出来るか。その時はたゞ死苦たへがたく、無常に逢つて腰をぬかして末期畜生の如くして死ぬばかりである。この三途の大河と云ふ事も、この時に當つて流れ出るものであるが、今はなか／＼説いても理解がゆきかねる事と思ふ。自分も曾て三河で大病になつた時、已に死にきわまつたが、この際たしかに死出の山、三途の川と云ふものに當面し

た。その苦痛は實に堪へ難く、たゞ、くわつ、くわつ、流れかゝつて來て目も口も開かれたものではないのである。此時自分も二瀬か三瀬までは渡つたと覺えた。誰れ人もこの事をたゞ愚かに心安く思ふてゐるのは實に氣の毒千萬の限りである。――

此の一段の中、武勇樊噲を欺く人も無常の鬼に向つて臆病を現はし、の言葉は如何にも正三その人の武士氣質を現してゐると思はれる。又た世々生々の耻、は更に深刻なものであつて次の段に委しく説かれてゐるが、血氣の勇は血氣盡れば用に立つべからず、の語には深く心を引かれるのである。これはたゞ死に當面した時のみの事ではない。眞實眞念を以て行つた事は多少の粗暴あつても悔る事ないが、血氣の勇に到つては行つた直後に悔が來るからである。然し、正三の此所に云ふ血氣の勇とはもつと別な意味で、所謂勇者の勇と解釋した方が正しいやうに思はれる。が私は普通の意味に於ての血氣の勇で、末期に當面した時は如何なるものであらうかと幾度か考へた。その際一つ二つ變な事例に出會つて、それにも亦疑問を抱いたことを、此所に擧げて見たいのだ。

その一つは、現代のやくざ者を描く事の巧みな陸直次郎君の書いた物の中に――ある氣の強いやくざの青年が、仲間から暗打を食つた。彼は生憎寸鐵も帯びてゐなかつたので散

散に斬られたが、それでも附近の家の臺所に飛び込んで、出刃を持ち出して相手を斬らうとしたのであつた。けれども己にその時はもう動けなくなつて病院に擔ぎ込まれたのであるが、取調べに來た刑事が、相手は誰れか、と訊ねても、彼は斷じて語らない。餘り口が固いので刑事は不審に思つて、どうして相手の名を言はないのかと訊ねた。すると彼は、今私が相手の名前を話したら、あなたはきつと捕へてしまふだらう。さうすれば自分が彼奴を斬る事が出来なくなるからだ。と答へたが……間もなく死んでしまつたさうである。一見して死の恐怖を知らないやうにも思はれる。又、飽くまで自己の慾念に生き抜いた如き感もする。彼は恐らく自己の死を知らず、相手を斬らうと思ふ一念の中に息が絶えたのだとすると、斬らう、の一念頭に即して生死を捨て去つた感も與へられる。がもとこれ憎惡の妄念に執した一念にほかならないのである。要するに死の到來が餘りに急速であつた爲に、無常の鬼に向つて臆病を現はすいとまもなく、此世を去つたまでである。

次に想ひ起すのは、五味國太郎といふ人間である。自動車運轉手で、兇惡な殺人犯である。彼の手記がある婦人雜誌にのつてゐた。それによると、彼は一種の宿命觀を抱いてゐた様であつた。その宿命觀が彼をして徹底的に自暴の底に投込んだ。自己の慾望の前には

哀憐などと云ふものゝ姿は全く消え去つた、誠に忌はしき存在である。従つて彼に云はせると、自分は今迄幾度か人を殺したが、どれを見てもその死に行く姿は誠に安樂である。そこに何等の苦痛の影も認めない。だから自分は平氣で人を殺した。平氣で人を殺した自分も、死は安樂と思つてゐるが故に、平氣で死んで行くのだと、そぶいてゐるのである。たゞ自分の共犯者に對しては、彼奴は自分が手傳はせただけだ。それに彼奴は死ぬ事を恐がつてゐる。だから彼奴は赦してやつて貰ひたい。と云つてゐる。こんな人間の言説の矛盾とか撞着は詮索する迄もない事であるが、たゞ私は彼の徹底ぶりには一寸參つたのであつた。長い間、割り切れぬ物が心の底に残つてゐた。

ある人が正三老人に、死をなんとも思はぬ事は偉いのか、と云ふ様な事を訊ねた。老人はそれに對して、死を何とも思はぬ様な人間はそれだけ業が深いのだ。罪人でも、極惡人ほど死刑の間に平然としてゐる。矢張り人間は、死を悲む心が菩提心の種となる。といふ様に答へてゐる。老人自身は戰場に於ては勇者であり、武士には胸腹を突き抜かれる程の心を以て死に習へ、と教へてゐるが、而も自分は死ぬがいやさに道に入つた。自分の佛法は臆病佛法である、と敢て言つてゐるのである。

白隠禪師は幼にして地獄の苦患におびへ、死の恐怖に戦慄したと自ら書いてゐる。死の厭ふべきは人間の根底を通ずる本能であり理念である。死を恐れ厭ふが故に、死に徹して死の隙をあけて生きると云ふ事は、生死を超越するの道である。死の恐怖を知らないのではない。五味の如き人間の徹底ぶりとても、結局人間としての情操知性に於て甚だ缺くる所あるのを示したに過ぎないのであつて、即ち彼の業の深さである。業の深いとは、人間として缺陷の甚だしきものといふのである。

その後、下村海南氏の、防空の爲のラジオ放送を聞いた時に氏は、爆弾が落ちて來たらどうしようか、と諸君は思はれるかも知れないが、どうせ人間一度は死ぬのである。病氣をして人に手数をかけてぐちゃ／＼して死ぬよりも落ちて來た爆弾ですかつと死んだら清くとして好いぢやないか、と云ふ風な事を言つてゐた。人の心を勵ますには適切であり、またその通りでもあるのである。空襲と云ふ非常の事に當面したら、我國民はこれほどの覺悟は勿論持つであらう。が更に望ましきは、平素に於ての此の覺悟の持續である。即ちいつでも命を捨て、死ぬ人になつてをられる事である。

さて正三に戻つて、次はまた、此恥は浮世の人知らざれば苦しからずと云はんや。夢幻

なる人間の中の耻だに、疎に思は更になし。況や未來永劫の耻に於てをや。此理を知らざるを理を知る人と云はんや。義ある人となさんや。さりとは兼て思ひ知給ふべし。理ある人ならば是を恐るべし。義ある人ならば勇猛堅固の心劍を以て生死の敵を截斷して大平に住すべし。

と云ふたのは、人この世に於て罪業を作り、死して後魚虫鳥獸の如きさま／＼の異生に變じて悪道に輪廻し、世々生々耻を暴すとは口惜き限りではないか。是を永劫の苦しきと云ふのである。さればこれを顧て思はぬと云ふ事があらうか。此耻は人が知るの知らぬのと云ふ沙汰ではない。さりとは此の道理を兼てよく思ひ知つて、勇猛心を以て生死に當面し、修し離れて大安樂の地に到れと云ふのである。――

正三は常に耻を知れ。と云ふ。此の耻は人前に於ける耻しさではない。自ら顧て耻るのであり、更により進めば自己嫌惡の激烈を透過しなければならぬ事である。勿論、徳川時代にあつては辱められる事は、人間生存の價値を奪はれる事であつた。此當時かどうか知らないが、借金の證文にも、萬一返済しない場合には人中にてお笑ひ下さるべく候、と書いたと云ふによつても證明される。此意味に於て、先頃安岡正篤氏が、官吏が誤

ちを犯した場合、罰俸などに處すると云ふは反つて物質尊重に墮するもの故、よろしく昔に返つて閉門何日等の方法によつて耻を感じしむる方が至要である。と説いてゐたのは誠に好い事と思ふ。

然し正三のは更に深刻な耻である。人の知ると知らぬの問題ではないのである。眞實や切れない耻である。大きく言へば時空を絶した耻と自ら感じなければならぬ。と云ふのである。もう二三十年も前であるが、武者小路君が少年時代の事を書いて、子供の時に何か思はぬ誤ちをして、それを人知れず思ひ出して思はず顔を赤くする事を、率直に描いたものに接して、心を打たれた事を憶えてゐる。今は我々も、かゝる耻しさを感ずる事も尠くなつた。情操が枯渴した爲であらう。然し、羞耻の根源は潜んで失はれず在るに違ひないのである。えらくなるならぬの問題ではない所の、此の眞實本質的な耻にこそ觸れ得なければならぬのだ。

正三は此所まで説いて云ふに、自分が『四民徳用』の初めに書いた中で、今説いた所までは、修行の人々に對する訓戒である。が此所から先は、心の用ひ様を書いたのであるから、その心して見るが好い。と云つて、先づ第一に、

修行の道、千差萬別なりと雖も、肝要は身を思ふ一念也。

と書いたのは、如何なる方法で修行するとも、肝要なのは身を思ふ一念を離れる事、此根本を措いて他にはない。一切の苦といふも此念から起るのである。此身をさへ捨て得たらば何が苦になるか。是れ即ち修行の對象をたしかに見届けた事を示したのだ。

次に、然れば凡夫心に物に勝つて浮心あり。物に負けて沈心あり。浮心を用ひるは佛界に入る門、沈心を用ひるは獄中に入るの道也。専ら出離の願力を以て、浮心を守るべし。

と云ふのは、凡夫の心に此の二筋あるが故である。浮心と云ふのはキツとして生きた位であつて、之れ即ち佛界の道である。晝夜を分たす此心を守るべきで、物に勝つて浮心の種々相と云ふも、所詮は勇猛を根本、本體としてゐるのである。最初の頃は、物に勝つて浮心の類とばかり書いたが、どうも人々の心の用ひ方が錯る所があるので、後に到つて勇猛心を體とす、と書添えたのだ。此の浮心を分つて十七段としたが、何れもこの體とする所は勇猛心である。何と云つても彼と云つても、たゞ此の勇猛心が修行の本體である。此心を用ひて事々物々に執着する一心を滅すこと一つ、これ以外に修行はないのであ

る。そこで十七段の心を説いて見ると、先づ、

第一 生死を守る心。と云ふのは、我々が生と云ひ、たゞ生きてゐると云ふ事は、執着を意味するばかりである。かゝる生は何の用にも立たぬもの、實にいやな悪いものとよく知つて、執着を離れた死こそ隙のあいたよきものと知つて、たゞ今死は決定と眼を著け、齒を喰ひしばつて直に死に習ふ心、これを生死を守る心、と云ふのである——即ち執着を離る、大死一番である。

第二 恩を知る心。恩を四恩と分つが、武士たる者は、君主の恩をよく知らなければならぬ。概して恩を知らないが故に、種々なる不義も生ずるのだ。人は恩を知るときこそ誠の心となり得るのである。

第三 一陣に進む心。と云ふのは、千騎萬騎の中へ驀直に突進する心を守ることである。——正三老人は現實的に千騎萬騎の中へかけ込む心を説いてゐるが、前に引いた白隠禪師の一文と對照すれば、意味深い事を覺えるのである。

第四 因果の理を知る心。と云ふのは、一切の起伏興亡も因果次第と思ひ定むれば、娑婆に望みもなくなつて心自ら樂である。又、命を取られるほどの事が來つても、自分は

知らなかつたが、我に此の因果こそあつたのであらうと思ひ定むれば、苦むこともなければ、又、人を恨む事もない。眞に何人にも心から知らせたいのは此の因果の道理である、これを守れば人間が如何ばかり苦惱を免るゝ事が出来るか判らないからである——

と正三は此一段は因果の道理を甚だ平俗に説いてゐるが、ある場所では因果不可思議の理をこらびあひの一句で道破してゐる。已に積極的には、分別仕置の無益を信じ主張する正三である。因果の道理も亦、然りである。かく／＼の事をしたが故に、その原因に對してかく／＼の結果が現はれると云ふ、結果の明かな實驗科學の反覆の如きものではない。たゞ各自の爲した行動が必ず他に影響する限り、結果は何れの時か何れの場合かに酬はれるべきを信するのである。原因は實に複雑多端であるが、我等がかくあるも、その複雑なる原因の結果であるが、遡つてその原因を究むるよすがはないのである。不可思議の原因であり不可思議の結果である事を信するを、因果不可思議と云ふのであり、一句に詮ずればこらびあひともなるのである。がもし誤つて單調な宿命觀に陥入れば、五味の如き結果にも到達するであらうが、それは又、因果の不可思議を信じ得ぬ人間の事でもある。

第五 幻化無常を觀する心。は、つらく／＼己れを省れば、どこに己れと取決めた所も



ない、實もない身ではないか。命と云へば一寸先も測られぬ身の上である。さてく偽  
の世界かなと強く見つめる心である。

第六 不浄を觀する心。と云ふは、誰れ人共に死體は不潔として眼を背けるが、自分が  
背負つてゐる所の死人は何より大切にしてゐるのである。此の死人こそ常に眼汗、鼻汁、  
大小便の溢れる所の一つも清き所のないものである。さてもいやなくされ物哉と、常住に  
らみ付けて守るべきである。

前にも引いたが、正三は路傍の水で口をそゝいで、侍者が、その様な汚い水で、と云ふ  
と、我口よりは清かるべし、と云つてゐる。眞實の意味に於て、人間の口の中と路傍の水  
と何れが清潔であるかは科學的にも疑問であらう。又、路傍の水では手をそゝぎ得る人  
も、人の吐いた唾には手も觸れ得まい。正三は又、他の場所、死人は清きもの、生きも  
のこそ不潔ものとも云つてゐる。淨も不淨も人間が勝手に下す判断である。淨と不淨に不  
拘、生ける此身に執着すること不淨中の不淨と正三は徹見してゐるのである。

第七 光陰を惜む心。(解釋なし)

第八 三寶を信仰する心。佛祖の出世なくば、我等衆生は是非をも辨へず、畜生と變つ

た所はないのである。然るに佛祖の出世によつて、理義を辨へ是非を知り、執着繫縛を解  
脱する教を聞き、尙其上に、末世の我等に到るまで救ひ拾はん御願力、さてく有難く  
忝き次第と思入つて、身命を抛つて信仰し奉るべきである。

と、眞實その通りである。世には御願力と云へば、己れを抛つ事はいやながら、たゞ身  
勝手に絶らうとする人もある。と思へば、白隠さんが、看經禮拜尻喰彌左衛門と云はれた  
と云つて、佛前に禮拜するのを耻辱のやうに考へてゐる僧もある。耻辱と考へるはまだ好  
い方で、それを怠惰の口實とするに到つては論外である。本尊佛、脇佛、守護佛は、何の  
爲にまつられてゐるのか。方便として、參詣者ばかりに禮拜させ賽錢を捲き上げるだけな  
ら一種の詐欺である。信仰なき佛像ならば、須く取拂ふべきである。黄檗は何によつて禮  
拜したのか、また一休禪師の、煎茶摘むべからず、坐禪すべし、看經すべからず、坐禪す  
べし、——は文字のまゝに行ふべきか。誠に信こそ能入の門である。

第九 此身を主君に抛つ心。とは、萬事を我が物己が爲と思ふが故に、萬事につけて苦  
が生じて來るのである。此身は主君の物ぞ、と抛つて使へば安樂である。しかと強く眼を  
着けて十二時中抛ち習ふべきである。——

と正三の無我、自隠の真心、共にあつげらんとした境地ではないのである。抛つべきに潔く抛つ事を強調する。

第十 自己を守る心。これは『麗の草分』の中に具に書き置いた故によく見るべし。要するに自己を守る心と云ふのは、寸分も機を抜かさぬ事である。毫釐も機を抜かせば早や物に負けるのである——と、『麗の草分』の中、不可忘自己一事の冒頭には、——如二猫捉鼠頭尾一般にして、雙目不瞬自己を正しく守るべし。心他に移る時は、煩惱の賊競ひ起つて自己の主人となる。彼に司られて後は、彼を亡す事難し、去れば常に六根門を堅く守つて、煩惱の賊を防ぐべし。佛道修行の肝要は自己を守る所にあり。十二時中において、刹那も間斷すべからず。夢中共に守る心なくしては、全く叶ふべからず——とある。

第十一 捨身を守る心。是も草分に具に書いてある。或は火に飛込み、水に飛込んで身を捨て、見、或は胴腹を突き抜かれて捨て、敵の備への中にかけて込んで捨て、様々に捨て習つて自由自在に捨て果つるほどに至る事だ。出来得る限り強く張合つて守るべきである。——又、ある場所では、相手あり張合つて身を捨てる事は易いが、何ともなく身を捨てる事は難いと老人は説いてゐる。何ともなく相手もなく身を捨て得る事こそ、命を捨て

て死ぬ事の出来る人である。我々にしても何の爲、何の事ならば死に得る氣もするが、ただ何でもなく死ぬ事は想念の上だけでも困難である。本當は何でもなくとも平氣で死に得なければ駄目なのである。そしてそこまで到達しない限り、我等の執着は斷ち切れない。正三老人が第一に勇猛の心を説き、次にはたゞこの糞袋を捨てる事と云ふ所以も、誠に此所にあるのである。

第十二 自己の非を知る心。何人でも皆自分の缺點が苦にならない故に、他人の善惡まで取り来て吾が胸に入れて地獄をわかすのだ。此の事丈は眞實人毎に知せたいと思ふ念が切だ。自分にしても以前は人を悪く思つた事も再々あつたが、今はたゞ自分一人が悪くして、人は皆よいと思ふてをる。——と誠に我々は自己の缺點を他人の中に發見しては非難してゐるのである。ある時正三老人の許へ来て、何某と云ふ人はあれほど大身でありながら、ひどく吝嗇な性質であると非難した者があると老人は即座に、ほゝろ貴公はえらい吝嗇な人であるな、と云つたやうな所があつた。

第十三 貴人主君の前に居る心。——これは何人も覺えのある事と思ふ。斯る場合には自ら、だらけてをられまい。覺えず心浮んでをられるであらう。——正三の浮ぶ、と

は、嚴肅、緊張の意味である事は、ずつと以前に書いた。世間の所謂明朗、活達、殊に近頃の所謂朗とは殆ど對蹠的である。人生の一大事を究め去らんとする者の浮心とは誠にかくあるべきであらうと、絶えず思ふ所である。

第十四 仁義を守る心。(解釋なし)

第十五 佛語祖語に眼を着ける心。と云ふのは、喩は夢幻泡影の語に接したならば、佛祖は執着を離れた幻化、己れは有相執着の身である事の意に徹せずんばおかすと、強く眼を着けて見る事である。

第十六 正直慈悲の心。是れはなで下して勝つた機である。喩へば、誰れも童には勝つてゐるが如し。——實に含蓄の深い言葉と思ふ。我々は、仲々撫で下す事が出来ないのである。

第十七 一大事因縁を思ふ心。これは仲々説明し難い。我と我心に備はる大事である。前に書いた生死の心に誠心成り切つて知る境地である。忽卒に思ひ習ふ事ではなく、從來書き來つた箇條の心熟したならば、自ら一大事因縁の心となるのである——

惠中は以上、正三老人の自注的解釋に對してかう云つてゐる。曾て彦根の人達が、此の

十七段の箇條に抄をなして頂きたいとお願ひしたが、師は抄を作れば誰れもそれを讀み、たゞ習事として實參究明を怠る事となる。これは習事に非すと云つて、お作りにならなかつたが、以上は自分が師から伺つたお話を密に書き留めておいた覺え書であると。

### 三 寶

續いて正三は、ある日會下の者に語つて曰く、

『今時佛法運用の法を誤つてゐる爲に、世上の人が皆、佛法は世間の用に立たぬものと思ふてゐるのであるが、之は斷じて左様ではない。先づ三寶は、世間の三つの寶として第一に世間の用に立つものである。もし左なくんば、三寶の名は偽でなければならぬではないか。されば此の廣大の三寶の徳用を知らしめたいが爲に、自分は「四民徳用」の冒頭に三寶の徳用を書いたのである。その中、

佛法修行は、六賊煩惱を退治するなり。心弱くして叶ふべからず。法身堅固の心を以て、信心勇猛の兵を先となし、本來空の劍を用ひて我執食着の妄想心を切拂ひ、切に急

に進んで十二時中間斷なく金剛の心に住し、夢中ともに用ひ得て、自然に純熟して内外打成一片となつて、業識無明の魔軍を悉く討滅し、忽然夢醒實有の城郭を打破り、生死の冤敵を截斷して般若の都に居住を定め、大平を守る此の心即武勇に使ふ寶也。

と書いた。

先づ佛法と云ふは、六賊煩惱を打滅す事である。併しながら世々生々、惡道好きになり切つてをる此身に、骨髓までも纏ふ敵を打取る事故、弱い心では斷じて成らないのである。法身堅固の心とは、即ち如何にしてもと云ふ、是非にと思ふ心を強く決定する事である。斯くすれば必ず信心が起り来る。信心さへ強ければ、勇猛心も必ず起るものである。勇猛心の生ずる所、精進遂行の心が起り来る。此の精進の心を以て、起り来る六賊煩惱の切を虚妄と認めて、素戯言々々と切拂へば、切な心、急な心、即ち一瞬も安閑としてゐられない心が起り来るものである。

此時に到つて此心、眠の中にも抜けず夢にも去らざる金剛心となり、遂に熟して内外打成一片、内にも一念不生外にも塵碍る境界なく、かくて業識無明の魔軍共を盡く打滅するを得るのである。併しながら、此境地もこれ迄は、まだ敵を漸く打負かしたと

いふだけで、自己に纏ふ實有の執着は盡きてゐないのである。更に大誓願を發して、一層勇猛精進して、始めてボカツと大夢醒め、ハラリと實有が破れ、此所に眞實實有が破れ、生死を出で、一切を離れた大安樂の境に住する事を得るのである。

此心、武勇に使はれまいであらうか。

第二に、佛法修行は禁戒を堅く守つて佛祖の教に背かず、邪僻曲折の心を退治し善心となり、理非分明にして理を離れ、無義の義を専ら用ひ、慈悲正直にして萬民を度す。此心便ち法度に使ふ寶也。

と云ふのは、理も義も、これを修し盡し離れて、理義にも執着なき時に到つて、自ら理非分明に到るのである。即ち心の發するに任せて爲すほどの事が法を越えず、これを無義の義と云ふ。然も慈悲心を以て萬民を度するのを念願とする。

此心、諸法度に使はれまいであらうか。

第三、佛法修行は我見を去り、自他無差別にして六和合（一、同戒和合、二、同見和合、三、同行和合、四、身慈和合、五、口慈和合、六、意慈和合）を用ひ、誠の心に至り、上四恩を報じ下三有の衆生を度す。此心則五倫の道正しく使ふ寶也。

と云つたのは、世上には佛法を以て五倫の道に缺けた法であると云ふ人が往々ある。仍て此段を書いたのであるが、佛とは我を捨て、無差別の心に到り、上四恩を報じ、下一切衆生を度す所の法である。之を五倫に缺けたりと云ふべきであるか。又、佛は一切衆生一子の如しとまで説き給ふ。然るに、儒道にありては漸くに五倫を至極としてゐる程度ではないか。

第四、佛法修行は慮知分別の心を去つて着相の念に離れ、無我の心に至つて私なく、物に任せて自由也。此心則諸藝能に使ふ寶也。

是等は、上手藝の藝者は知る所である。殊に武藝者等は、一入よく知つてをるべき所である。

第五、佛法修行は邪愆の心を除滅す。因つて茲に奢心諂心貪心名聞利養の心なし。此心則渡世身すぎに使ふ寶也。

と云ふのは、今時の人は皆錯つて、佛法は世間身すぎの用に立たぬものと思ふてをるが故に、此段を書いたのである。佛法を行ずるは萬々の邪愆の心を滅して惡心失せるが故に、何處にあつても障りなく、世を渡るのである。多くの人々は皆下手に奢り、非分に愆

をかばひて身を滅してゐるのである。大名も小名も、是が爲に身を没してゐる。總じて惡心のあるものは何處にあつても住み憎いものぞと云ふ事を説いたのである。

さて是迄の五段は、三寶の徳用十段の中前五段を説いたのであるが、これから後の五段は口で云つても詮のない事である。自分はやがて死ぬほどに、人々に佛法念願の筋をよくよく知らせたいと思ふて、あれを書いたのであるが、之を讀んでも讀んだだけでは俄かにその儘に用ひられるものではないのである。世々生々をかけて、如是修せんと爲す所の筋をよく心得て、之を念願として修し行ぜよ。之れと共に、一世や二世でなるべき、安易な事に非ざるを覺悟せよ。』と此所にも反覆して説いてゐる。

全く我々は禪堂に入つて一坐か二坐の坐禪を爲し、二三回入室して師家の鉗鎚を受ければ、それで直ちに三昧發得するかの如くに思ひ勝ちである。勇猛の衆生は成佛一念にありの一念は如何なる一念か、此の一念に三昧發得もすべきであるが、發得したる三昧は、ただく行ひ行く中に把握されるものである事を、覺悟しなければならぬのである。獲得への不斷の遂行こそ、三昧なのである。

然るにとすれば、成佛一念の一念を、規定されたる到達點の如くに考へる所に、安易

なる大安樂の境地への欲望が湧く、やがて達し難き到達の恨みは懈怠となり、折角の修行も抛棄するに至るのだ。正三老人は、修行者の此事を常に憂ひてゐるのである。されば仲一世や二世では到り難き覺悟をまづ強調する。盡未來際、人の修行には懈怠の生ずべき理由はないからである。――

それで、

自分も此の筋はよく辨へ、隨に種は取つたれども、自由に用ふる事は出来ないでゐる。喩へば丁度金は金と見附けたが、手に取らざれば自由に使ふ事を得ないやうな状態だ――と語つてゐる。

正三の意圖する所、といふよりも渾身を擧げての全目的は、佛法をして世上萬般の上に殘る所なく顯現せしむる事である。前に書いた『四民徳用』に對する自註的説話に於ても、始めは佛法を武勇の上に用ふるやう書き與へよと云はれて書いたのであるが、所詮農工商共、用ふる所は一つである。それ故業を替へて四民の上に分けたのであるが、歸する所は同じく一つ、佛法世法の二にあらざる事にある、と云つてゐる。

かくて、今時の人は皆、佛法と云ふものは世間の用に立たぬもの、渡世身すぎの役には立たぬものと思ふてゐるが、その儀に非ず。佛法が世法の上に全く顯現した時こそ、眞實意義ある人間の生活が行はれるのであるとの信念から、『四民徳用』は出發してゐるのである。已に佛法は、加持祈禱の爲でもなく、淨土を來世に求めんが爲でもなく、彼岸のものでなく、此岸たる此の脚下に持ち來して、日々行じて行く所に、本來の姿を發見してゐるのである。

### 浮ぶ心、沈む心

正三は浮ぶ心、沈む心を説く。浮ぶ心を守る時は、忽ち出て死すとも苦患軽くあるべし、と云ひ、沈む心に住する時、忽ち出て死せよと云はゞ苦患強かるべしと説き、又、浮ぶ心とは急度生きた機である。とも説いてゐる。即ち、四六時中きつと果し眼となつて、自己を見据ゑた態度である。

かくて煩惱妄想に面出しせしめず、農者は一鋏一鋏に、南無阿彌陀佛と土を返して、世界養育の大誓願を果し、工匠は自己の手足の運用無礙なる己れを信じ、一大事の志を勵し

て所作所爲の上に於て、切に急に眞實勇猛の念佛を以てして世界の用所を調ふべく、商人は専ら私欲の念を捨て、此賣買の作業は國中の自由をなさしむべき役人に、天道より與へ給ふ所なりと思ひ定め、此身は天道に任せて得利を思ふ念を休め、一筋に國土のため萬民のためと思入つて、自國の物を他國に移し、他國の物を我國に持來て、遠國遠島に入渡し、諸人の心に叶ふべしと誓願をなして、國々をめぐる事は業障を盡すべき修行なりと心を着けて、山々を越えて身心を責め、大河小河を渡つて心を清め、漫々たる海上に船をかふる時は此身をすて、念佛し、一生は唯浮世の旅なる事を觀じて、一切執着を捨て、欲を離れて商して行く所、こゝに佛法世法一致の顯現を認めて、たゞこの顯現を欲してゐるのである。

曾て正三が、自分は無我にはなり得ない。然し世の中と世の人を少しでもよくしたいと思ふばかりが、自分を無我にさせてくれる、と云つた言葉は、此所に生々と躍動して來てゐるではないか。

浮ぶ心を以て心の底の心として、きつと果し眼となつて己を見据ゑ、煩惱妄想に面出しさせず、只管に己れの携る職能に精根を打ち込んで行く事が、正三の熱求した萬人の撓

# 欠

# 欠

きめつけてもゐるのである。此點に關する正三の意中も態度も今の我々には判然と知る事を得ないのである。が、何れにしても、政治的に動くべく、正三の性情は餘りに純であつたのではあるまいか。宗教のことは、信長以來天下を治める人々の苦痛の種であつた。信の後を受けた秀吉は妥協をした。家康は寧ろ事勿れ主義で、民衆の信ずるところに任せやうである。それ故に、日蓮宗が他宗を誹謗するが如きは、寧ろ社會の安寧をみだすものと見てゐた如く、自己の宗義を説くことは好いが他宗を誹謗するが故にいけなゝとして、片手落に近い裁斷をも下してゐる位である。

であるから、もしも正三が時の有力者に内々自己の心事を語つたとしても、恐らく實現する時は來なかつたに違ひない。が、その時の來らぬのに惱む正三の態度は實に深刻なものがある。

彼は時々思はず此の憤懣を洩す。殆ど問はず語りである。出來る事なら御前に罷り出て此事を申上げ、正三が非ならば腹搔切つて死ぬるまでと云ふ、彼は御前に法論を開き、もしも自己の所信が誤つてゐたならば死して謝するのみ、とも云つてゐる。然し佛法本來の目的は衆生を成佛せしむる事にある、と云ふ所に脚を下してゐる彼は、その點は甚だ強き



自信を持つてゐた。たゞその法論も行はれず、所願實現の到らぬのに惱み抜いた。

已に七十を越え、死期近きを知つた彼は、遂にはもしも自分がこのまゝ死んだならば、怨靈となつてもこの事は申上げたいと悲痛な言葉を吐いてゐるが、此處に正三佛法の眞面目が躍々として現はれてゐると私には思はれる。彼は已にしばらく云つた如く、悟りの、見解の、と言ふことは殆ど重きを置かない。たゞ修し修して行くのみである。安樂の境地などは殆ど求めない。願ふ所は、此世に佛法の行はれることである。

七十七歳にして遷化する末期の数日前までも、病臥の中にあつて弟子が近づけば、近頃佛法に何か變つた事はないか、と訊ねたと云ふ位である。佛法だに世に行はるれば、それ故に何とかして行はれるやうに、とたゞそのみであつた。彼の執着煩惱はそこにあり、それが爲には怨靈となるとも、三熱の苦も無間地獄も厭ふ所ではなかつたのである。已に自我を離れた執着であり、煩惱である。菩薩の煩惱は即ち願輪である。已れ獨り悟を開き、已れが安樂の境地に到らんとするが如き願望ではないのである。此所に執着と燃焼を認めてゐる所に、正三の面目があるのである。

彼はある時、自分の法は、關東亂波に適してゐると述懐してゐる。白隠禪師も或時優柔

不斷の僧を戒めて、鈴木正三は關東亂波の性と云ふ事を云つてゐるが、汝はよく／＼此の關東亂波の性に遠い奴だと罵つてゐる所を見ても、白隠禪師の心の中に關東亂波の一句はよく／＼沁み込んでゐたものと思はれる。即ち勇猛果斷である。凡ゆる事象に全生面を擧げて當面せよ、と云ふのである。蓋天蓋地である。それが爲に日常寸時の油斷なく、死を見つめて修行せよ、と正三は説いてゐる。鍋島の葉隠れの中に現はれる語句に、正三の吐いた句に通ふものがあるのが如何に多いかを見ても、白隠禪師が正三の言句を引く事一再ならぬを見ても、正三の及ぼした所は仲々に深く廣いものがあるのである。序に記しておくが、心學の講義の中にしば／＼出て來る、我れ無し、といふ言葉も正三が用ひ初めたもののやうである。

正三遷化の後、彼の教を受けた者の中から、仁俠の徒が多く現はれるに到つたのに驚いて、弟子惠中は遂に専ら唱名念佛に歸するに到つたと東嶺禪師は書いてゐる。如何にも人好げに暮してゐても、たゞ己ればかりにかまけてゐるのはロクでなしと嫌ひ、浪人無人の如き無法者でも、人の爲に身を提する者こそ好い、とほめた正三の下から、仁俠の徒の出づるのも誠にあり得べきことである。

仁侠の時代は去つた、といふやうな言葉が十八世紀の終り頃の歐羅巴にあつたといふ事である。もとより、これは法の大本から遠ざかつたものであるには違ひない。然しその大本に於て勇猛果斷を専らとする所、その末の自ら此所に走るも亦止むを得ない所であらうし、又、正三はそこに關東亂波の性を認めたのもあらう。

正三は佛法が有力の檀那によつて社會化する事を希つた。然し、彼の生活は飽迄も土に即してゐた。権力に近づくべく、彼は餘りにも純であつたやうである。上を尊び、忠の一念は離れる事なかつたが、彼は目的の爲政策の爲近づき得なかつたと云ふのが本當であらう。然し彼の倦む事なき、勇猛の機の教は、浸々として民衆の中に沁み透つて行つたのである。彼の怨靈の本質は、葉隠れに生き、自隱禪師の中に生きて光を放つたのである。

正三はその意圖する所の願望の實現せざるに苦惱したが、その本質は彼の意圖のほかにあつて、寧ろ本質的に生きて、今日に到るも尚よく衆生を教化してゐるのである。眞實の宗教は政治の力を待たねばならないものでない事は敢て言ふまでもない所である。反つて政治を行ふ人々の心に力を與へる所の純なるものこそ宗教だからである。

かくて七十七歳の夏、末期の近づくを知るや、神田鈴木町の舍弟の家に死所を定め、能

き死所として室を閉してしまつたのであるが、末期兩三日前に到つて諸人の見舞を許したのである。其時である、惠中の記す所によれば、

一僧猶法要を示給へと云ふ。師はつたと睨んで曰く、我三十年云ふ事を得受けずして左様の事を云ふ、

正三は死ぬ、と也。

其後法要を問ふ者なし。時に明暦元年六月二十五日申刻(午後四時頃)安然として遷化し給ふ。と、

正三念願の如く佛法守護の怨靈と化し去つたのである。

(了)

## 鈴木正三略傳

本姓は穂積氏、俗稱九太夫、正三はその名なり。後ち出家して更に之を法名とす。一に曰く、名は重三、玄々軒また石平道人と號す。三河國加茂郡足助の人。正三の遠祖に善阿彌と云ふものあり、文治年中故あり、紀州藤代を出で、三州高橋庄矢並村に移り、その後子孫世々松平氏の幕下に屬せり。善阿彌より十余世を経て重次といふものあり、即ち正三の父なり。

重次もと本宗を嗣ぐべきに、その幼時父の重政逝去せる故、重政の弟信光之を嗣げり。而して重次成長の後徳川家康より別に五百石を賜り、足助庄則定村を領す。天正七年正三を生む。正三資性精悍なれども諸弟を恵みし故、弟重成をして家を嗣がしめ、而して自ら高橋庄七十騎士某の家を嗣げり。其後家康の關東に移るや、高橋騎士をして悉く上總に移らしむ。正三乃ち鹽子村に住す。初めこの騎悉く佐左衛門尉組なりしが、後更に本多佐渡守に屬す。時に關ヶ原の役あり、正三乃ち秀忠に屬して戰に臨む、年正に二十二なり。凱旋の後この騎士殊に勤勞ありしを以て、上番の事免じ縦して家に歸らしむ。時に正三既に遁世の志あり、遂に家をその子に譲りて四方の寺院に賽したり。而も猶髮を落さず、後

大阪の役あるに及び、正三再び出でて、本多出雲守の營に屬し、是冬凱旋の時三州岡崎に於て始めて家康に見え、功あるを以て新に二百五十石を賜はり、翌年春家康出陣の時正三また之に従ふ、時に年三十七なり。後正三秀忠に奉仕して江戸城に居る。また高木主水正組に屬して大阪番を勤めたり。時に天下靜肅にして武官稍々隙あり、是に於て正三始めて身を佛門に委ぬ。秀忠その志を憐み祿をその子に給することを許す。正三乃ち他家の子を養ひ、公の謁見を得て家を嗣がしめたり。その子孫世々九太夫と稱したりき。

正三性極めて強勇なり、常に曰く、凡そ人は丈夫心に住して生死を視ること一なるにあらずば、武士の武士たるものに非ずと。是に於て毎日眼を死の一字に注ぎ、死を視ること猶生の如くせんことを努めたり。

又嘗て曰く、佛寺の門外に仁王像と稱するものあり、骨格強大にして、武勇畏るべき形あり、若し人此の如くならずば何を以て生死に勝つことを得んやと。是に於て又仁王坐禪の法をなして死に勝つことを練磨す。その修行の事は門人惠中が著す所の驢鞍橋に詳かなり。正三薙髮の後三州加茂郡石平山恩眞寺に住して數人を教化せしが、後江戸に到りて衆人を引接し、明暦元年六月二十五日終に遷化す、年七十七。湯島天徳寺に葬る。法名を了心庵石平和尙といふ。正三著して麓の草分、盲安杖、万民徳用、二人比丘尼、念佛草紙、破吉利支丹、因果物語、テウス物語、自己安心、草庵雜記、海上物語(或は是弟子惠中の作と)反古集(同上)あり。

昭和十八年十二月十五日初版印刷  
昭和十八年十二月二十日初版發行  
(三〇〇〇部)

〔勇猛禪の鈴木正三〕  
定價金壹圓八拾錢

著者 宮嶋蓬州

發行者 東京都麹町區內幸町二ノ二 石原俊明

印刷者 東京都牛込區市谷加賀町一ノ二 本多英男

印刷所(東京) 東京都牛込區市谷加賀町一ノ二 大日本印刷株式會社

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社  
(日本出版會會員番號一六〇五四)

(認承協文出) 340030



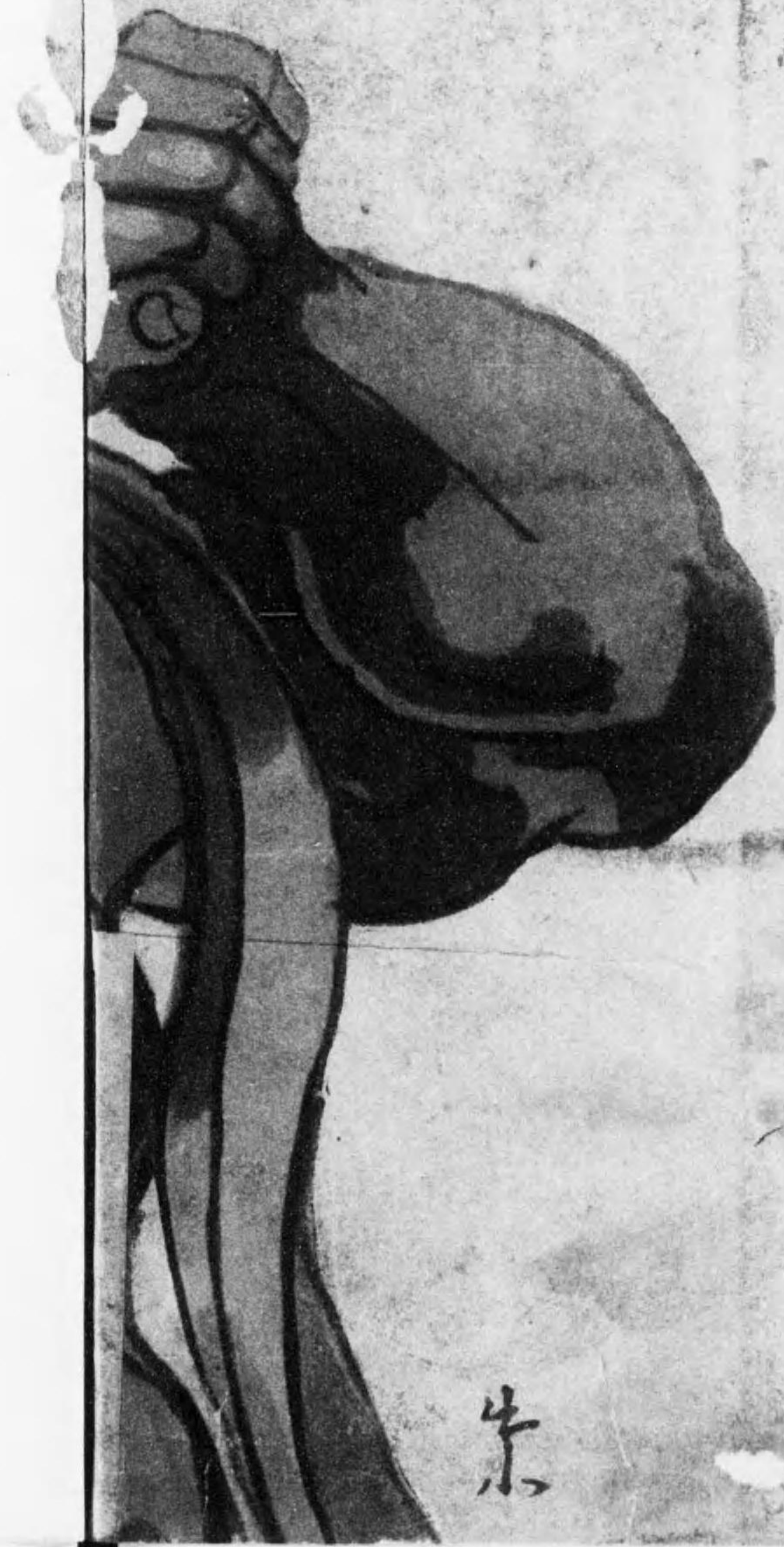
發行所

東京都麹町區內幸町二ノ二

大法輪閣

振替東京一九番  
電話銀座一八六・一六〇六番

7F57



朱

終